

# 至誠

明治神宮武道場  
至誠館 館長 荒谷卓

現在、領土問題をめぐり近隣諸国との関係が悪化している。

領土問題では通常、係争中の両国共に言い分があり、何らかの権益保護をめぐって対立していることが多いため、当事者間で解決策を見出すことは容易ではない。

本来、政治的な利益の調整は不可能ではないが、国民レベルで議論が熱くなっている場合、そうした調整も困難になり、硬直状態に陥る。

今回は、日本の武道的な観点から、そうした領土問題の解決策を考察していこう。

領土問題では、兎角、同じ土俵に立つて相手と非難し合い、問題が泥沼化することが多い。日本の武道の観点からは、そもそも同じ「位」に立つて勝負するのは賢い戦い方とは言えない。

武道には「位の勝負」という概念がある。これは小さな視点で攻めてくる相手に対して、大義を含めてより大きな視点から対峙するという考え方である。

個人の武道で言えば、「位」にあたるのは、これまで本連載で述べてきた「中心力」であり、高位高所から考え行動する者ほど「格が高い」存在になる。山岡鉄舟の無刀流に代

表されるように、「格の違い」を示せるくらい実力がついた状態になれば、刀を使わなくとも、相手が敵対心を失ってしまう。

武道には、「格の違い」により、民心を掌握し、さらには敵対者にたいする包容同化力での戦いを制するという、平時も戦時も時の領域まで兵法の概念の中に含めてい

る。そういう意味ではクラウゼビッツや孫子よりも幅の広い「戦い」の概念を持つていると言えるだろう。

では、どこからこのような武の視点が生まれたのだろうか？

## 神話に見られる日本の武の原点

日本の武道場には神棚がある。一般的には、鹿島・鹿取の武神を祭って、神の御前で心身を鍛練する。その理由は、その神が日本の武のあるべき姿を神話の中で示しているからである。

例えば、鹿島の神タケミカヅチノカミの「国譲り」の話がある。まさに国と国の統治についての交渉が展開される物語だ。

高天原の命を受け「オオクニヌシノカミ」は葦原中国の国造りを進めていた。しかし、

ひどく騒がしく乱れている様子。「アマテラスオオミカミ」は自らの子孫がこの国を統治させることとし、荒れすさぶ神々を和らげて帰順させようと交渉を重ねる。

交渉は度々失敗し、ついに剣(武)の神タケミカヅチノカミが使者として遣わされることとなる。

「オオクニヌシノカミ」の交渉が始まる。ここでは交渉のことを「ことむけやわす」と表現している。これは「言葉」を向けて「和すやわす」という意味である。つまり、言葉に向けて平和を交渉するということである。

ここには日本人にとつての「平和」の概念が示されている。「たいらけくわす」、すなわちどちらか一方の意見を通すのではなく、相互の想いを「平らにして」お互いが自律して協力し合える状態を「平和」と呼んだのである。

ではその「ことむけ」の内容はどうだったかと言ふと、その基本はいかに相手の尊敬を守りながら納得させるかという点にある。

神話の中では、「タケミカヅチノカミ」は、「オオクニヌシノカミ」の尊敬を子孫孫まで守り通すことを約束し、「祭り」という形を通じてその存在を永遠に敬うことを誓う。そのために出雲大社という日本のお社を建

てる。(その約束は現在まで守られている)

また同時に、「位の違い」も示す。それは統治の概念の違いを通じて明らかにしている。「オオクニヌシノカミ」の統治の仕方は「うしはける」と言つて、これは「私」の管理下に置くという意味である。つまり「私のもの」として領民、領域を支配する」という統治の仕方だった。

一方、これに対して「アマテラスオオミカミ」のそれは、「しろしめす」統治だった。「しろしめす」とは「知る」の尊敬語で、「統治とは領民の心や状況を知る」という意味である。

同じような言葉で「きこしめす」(人の意見、声を聞く)、「みそなわす」(人の様子や行いを見る)等もあるが、要するに見たり聞いたりを通じて、人々の生活や考えを知ること(民意を集約し、すべての人々が幸福になるような統治をする)という意味だ。

当然、「しろしめす」統治は、私物として支配する統治に比べて、国民の立場からすればよほど上等な統治と言える。国民にとつてどちらがいいのか、という「施政の考え方の格比べ」の勝負になるわけだ。

そこで「オオクニヌシノカミ」は納得をして国を譲ることになる。

ただ「オオクニヌシノカミ」には3人の子供がおり、うち2人は同意するのだが、一番下の子供は納得せずに「タケミカヅチノカミ」に戦いを挑む。

ここで戦いになるのだが、この時タケミカヅチノカミは、「ことむけやわす」交渉をするにあたり、「剣をサカシマに突き立て、その先に座つてから交渉を始めた」とある。この剣を突き立ててから交渉に入ったという辺りは、ひ弱な平和主義とはまったく違う。「ことむけやわす」にあつて、武力の裏付けをしつかりと持って臨んでいるのである。

「ことむけやわす、まづらわぬ者は討つ」というのが戦いの理念である。「まづらう」とは祭りを二つにするという意味だ。「祭り」とはそもそもコミュニティの価値観をつにする行事である。つまり「お互いに価値観をつにする」お互いが二つの価値観にまともなうとする(ことを拒否した場合のみ、武力を使う)という意味である。

さらに、武力の使い方にも正義の道理があることを教えている。

「タケミカヅチノカミ」は、3番目の息子「タケミナカタノカミ」と戦うことになる訳だが、武力では相手を圧倒する。彼を諏訪の地まで追いつめて戦意を鎮める。そして、相手が度降伏したら、その扱いは「オオクニヌシノカミ」に対するのと同じように丁寧に扱う。その諏訪の地にお社を建て、彼の尊厳を永遠に祀るという治め方をするのである。「まづらうもの」は、ともに尊厳の共存を保ち共存を図るということだ。

このように武力行使も、その後の戦後処理も、神話の中では二つの確固たる思想で貫ぬかれている。

## 武の伝統に則つた明治外交

こうした思想は、実は明治時代までわが国の政治思想として生きていた。

明治4年に日本とロシアで樺太の国境策定をめぐって対立し、両国民間でも議論が高揚したのだが、当時明治天皇が副島種臣を全権として派遣する時に、次のように命ぜられた。

「爾種臣其レ機宜ニ從ヒ其事ヲ正シ兩國人民ヲシテ其慶福ヲ保タシメ且ツ以テ交誼ノ益厚ク永久渝ラサラントラ是朕カ深ク望ム所ナリ」

つまり、両国の人民の幸福を維持して長期的な友好関係が結べるような解決策を模索するよきにと述べられているのだ。

日本の武の伝統に沿つた方針が建てられていたと言えらるだろう。神話から続く日本の武の伝統には、我々以上に相手の国民に対して誠意を尽くすという教えがある。

第三者が見ても、自国利益だけでなく、相手国の国民の事を考えた提案とはつきり分かる誠意のある交渉を持ちかけるのだ。

明治政府の対韓外交をめぐるといわれる西郷・大久保論争も、こうした観点から捉えることが出来るだろう。当時、大久保利通と西郷隆盛が対立した時、西郷は明らかに武の伝統に則つた道義主義を貫徹しようとしていた。板垣退助たちがすぐにも武力を使えと息巻いているときでさえ、西郷はまずは誠意を尽くして話をすべきと訴え、そのために自分が朝鮮に行くこと主張したのだ。

これに対して大久保は徹底した合理主義を主張し、恥をかこうが何をしようが自

国利益を優先させて、西郷と対立。この論争では最終的に大久保が勝ち、西郷が下野した。

ここでは、近代国家以降のわが国における国際政治に挑む基本方針をめぐる論争があった。どのような政治思想で外交交渉をするのかをめぐる最後の戦いが西郷と大久保の間で戦われ、日本は大久保の勝利と共に、西洋合理主義的な路線でその後の国際外交を進めていくことになったのである。

しかし、少なくともこの時点では、西郷のように武の伝統にしたがった政治思想に基づく外交をしようという考えが存在していた。西郷は神話と同じ事をやろうとしていたのだ。最後まで誠意を尽くし、妥協のためのオファーまで用意し、それでも駄目な場合のみ、武力に訴える。相手に対して、誠意を尽くした分、道義的には優位な立場に立てるのである。

現代の国際政治では、力のある物が実力を使って大義を勝ち取ってしまう。アメリカの外交がいい例だし、長い目で見れば、その国の力が衰えれば力できりあげた大義は崩れてしまう。

より長い歴史を考えたときに、二つの行動が道義主義で貫徹しているかどうかは、国家の存続の上でも重要なことである。もちろん何も実力のない平和主義など役に立たず、武道の観点から言えば平和を目指しながらも一方で実力をつけていかななくてはならない。

現在のより合理的主義だけの交渉では、弱肉強食がより一層顕著になるばかりだ。現代の領土問題に照らし合わせて考えるならば、係争地について両国の人民双方

にとつてより満足ができる、より発展的な解決策を提案できた方が「格の高い」戦いであるということになるだろう。

この論法で行けば、現在の国境という概念すら捨てる発想が必要だ。現在の国境とは、明確な権利の排他的独占ラインを記したものであり、この国境概念が当たり前になっている。しかし、国と国の境を、それぞれの独占的な占有権を下に画的に引いていくという概念そのものを変えてしまうような、新しい提案をしていく時ではないだろうか。

両国民だけでなく世界から見ても、もっとも有効な地域の活用の方を提案し、世界中の国境問題の管理の仕方のモデルを提示する、そのような新たな国境管理の提案までできるような発想が必要だ。

武道が神話にまで遡って探求してきた工夫は、十分に現代的な意味を持つ。かつての指導者たちは、武道の稽古を通じて政治や行政の在り方を体得していた。日本の武道には、政治的発想、行政的な発想を鍛練する方法が内包している。長い戦いの実践経験から、どのような戦いをするかは、より安定した社会の発展が可能となるか。そうした発想が体系的に稽古の中にプログラムされてきたのだろうか。

勝負の前の作法、戦う前に礼を尽くすことの意味、戦い方のあるべき姿、そして勝負が決した後に対応までが一つのセットになり、武道の稽古になっている。

領土問題を中心に多くの難問に直面する日本の指導者たちは、今こそ武の原点へ遡り、長い人類の歴史の中で評価される道義に基づいた外交を展開すべきである。